

感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 －2024年（令和6年）－

山口凌 恒益知宏¹⁾ 矢野浩司 藤崎淳一郎²⁾ 野中勇志

Summary of the 2024 Annual Report According to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture

Yamaguchi Ryo, Tsunemasu Tomohiro, Yano Koji, Fujisaki Junichiro, Nonaka Yuji

要旨

2024年に県内では全数把握対象91疾患中、23疾患が報告された。疾患別では結核（105例）、梅毒（162例）、百日咳（59例）の報告が多かった。梅毒は2023年の過去最多に次ぐ報告数となった。また、劇症型溶血性レンサ球菌感染症も、過去最も多い報告数（21例）となった。

定点把握対象疾患のうちインフルエンザ及び小児科対象疾患については、報告総数が前年の0.9倍、例年³⁾と同程度、全国の約1.3倍であった。眼科定点対象疾患の報告総数は、前年の約0.7倍、例年の約0.3倍、全国の約1.3倍であった。基幹定点対象疾患の報告総数は、前年の55倍、例年の約1.3倍、全国の約0.6倍であった。月報告対象疾患の性感染症の報告総数は、前年と同程度、例年の約1.3倍、全国の約0.7倍であった。薬剤耐性菌感染症の報告総数は、前年及び例年の約1.1倍、全国と同程度であった。

キーワード：感染症発生動向調査事業、宮崎県、全数把握、定点把握

はじめに

当研究所では、1994年（平成6年）から感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に情報提供し、感染症の発生及び拡大の防止並びに公衆衛生の向上に努めている。

今回、本県における2024年（令和6年）の患者発生状況をまとめたので報告する。

指定届出医療機関（以下「定点」という。）は、感染症発生動向調査事業実施要綱^{※文献1)}に基づき選定した（表1）。

表1 保健所別指定届出医療機関（定点数）

保健所名	定点種別				
	インフルエンザ 新型コロナ	小児科	眼科	基幹	STD
宮崎市	16	10	3	1	4
都城	10	6	2	1	2
延岡	7	4	1	1	2
日南	5	3		1	1
小林	4	3		1	1
高鍋	6	4		1	2
高千穂	2	1			
日向	6	4		1	1
中央	2	1			
計	58	36	6	7	13

調査方法

1 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（以下「感染症法」という。）で定められた116疾患を調査対象とした。

企画管理課 ¹⁾ 現県立延岡病院 ²⁾ 元衛生環境研究所

³⁾ 新型コロナウイルス感染症流行前の過去5年間（2015年～2019年）の平均

2 調査期間

全数把握対象疾患、定点把握対象疾患については2024年1週から52週まで、インフルエンザについては2024/2025年シーズンの2024年41週から2025年14週までをそれぞれ調査期間とし、診断日をもとに集計した。

結果

1 全数把握対象疾患の発生状況

1) 一類感染症

報告はなかった。

2) 二類感染症

結核 105 例が報告された。

a) 結核 Tuberculosis

報告数は105例で、前年と同数であった。病型は、肺結核が41例、その他の結核（結核性胸膜炎、結核性リンパ節炎等）が23例、肺結核及びその他の結核（結核性胸膜炎、粟粒結核、結核性リンパ節炎）が4例、無症状病原体保有者が37例であった。宮崎市（67例）、都城、延岡（各12例）保健所からの報告が多く、性別では男性が55例、女性が50例であった。年齢別では60歳以上が全体の約7割を占め、20歳代が全体の約2割を占めた。

3) 三類感染症

腸管出血性大腸菌感染症 45 例が報告された。

a) 腸管出血性大腸菌感染症

Enterohemorrhagic *Escherichia coli* infection

報告数は45例で、前年（27例）の約1.7倍であった。患者が27例（うちHUS発症：1例（O157））、無症状病原体保有者が18例であった。O血清型別では、O26が15例、O157が9例、O111が7例、O115が3例、O8、O91、O112、O168が各1例、不明が7例であった（表2）。宮崎市（20例）、都城（17例）、日南（4例）、中央（3例）、小林（1例）保健所からの報告であった。年齢別では0～4歳が全体の約3割と多く、発生月別では、5月が全体の約3割を占めた。また、3件の集団発生事例が報告された。

表2 O血清型別報告数

O血清型	報告数
O26	15
O157	9
O111	7
O115	3
O8	1
O91	1
O112	1
O168	1
不明	7
計	45

4) 四類感染症

E型肝炎4例、A型肝炎1例、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）8例、つつが虫病35例、日本紅斑熱16例、レジオネラ症16例及びレプトスピラ症1例が報告された。

a) E型肝炎 Hepatitis E

報告数は4例で、宮崎市（2例）、都城、日南（各1例）保健所からの報告であった。年齢は60歳代が2例、40歳代、70歳代が各1例であった。主な症状として発熱、全身倦怠感、肝機能異常等がみられた。

b) A型肝炎 Hepatitis A

報告数は1例で、都城保健所からの報告であった。年齢は40歳代で、主な症状として全身倦怠感、発熱、食欲不振、肝機能異常がみられた。遺伝子型は不明で、推定感染経路は経口感染であった。

c) 重症熱性血小板減少症候群

SFTS (Severe Fever with

Thrombocytopenia Syndrome)

報告数は8例で、宮崎市（4例）、延岡（2例）、都城、日南（各1例）保健所からの報告であった。性別は男性が2例、女性が6例で、年齢は80歳代が4例、70歳代が3例、90歳代が1例であった。主な症状として発熱、頭痛、筋肉痛、神経症状、腹痛、下痢、嘔吐、食欲不振、全身倦怠感、血小板・白血球減少、リンパ節腫脹、出血傾向、紫斑、消化管出血等がみられた。患者の発症時期は、4～11月であった。

d) つつが虫病

Scrub typhus (Tsutsugamushi disease)

報告数は35例で前年(33例)とほぼ同程度であった。宮崎市, 小林(各9例), 日南(8例), 都城(7例), 高鍋(2例)保健所からの報告で, 性別は男性が19例, 女性が16例, 年齢別では70歳代が全体の約半数を占めた。主な症状として頭痛, 発熱, 刺し口, リンパ節腫脹, 発疹等がみられた。患者の発症時期は例年どおり冬季で, 12月(20例), 11月(9例), 1月(5例), 10月(1例)の報告であった。

e) 日本紅斑熱 Japanese spotted fever

報告数は16例で, 宮崎市(7例), 都城, 小林(各3例), 延岡, 日南, 高鍋(各1例)保健所からの報告であった。性別は男性が6例, 女性が10例, 年齢は80歳代が8例と多く, 次いで70歳代が5例, 40歳代, 60歳代, 90歳代が各1例であった。主な症状として発熱, 頭痛, 刺し口, 発疹, DIC, 肝機能異常等がみられた。患者の発症時期は4月から11月であった。

f) レジオネラ症 Legionellosis

報告数は16例で, 病型は肺炎型15例, ポンティアック熱型1例であった。宮崎市(9例), 都城, 日南(各2例), 延岡, 高鍋, 日向(各1例)保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で, 年齢は70歳代が7例, 60歳代が4例, 50歳代, 80歳代が各2例, 30歳代が1例であった。主な症状として発熱, 咳嗽, 呼吸困難, 下痢, 意識障害, 肺炎, 多臓器不全等がみられた。

g) レプトスピラ症 Leptospirosis

報告数は1例で, 宮崎市保健所からの報告であった。性別は男性で, 年齢は60歳代であった。主な症状として発熱, 筋肉痛, 結膜充血, 黄疸, 腎不全がみられた。

5) 五類感染症

アメーバ赤痢5例, ウイルス性肝炎3例, カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症4例, 急性脳炎1例, クロイツフェルト・ヤコブ病4例, 劇症型溶血性レンサ球菌感染症21例, 後天性免疫不全症候群3例, 侵襲性インフルエンザ菌感染症4例, 侵襲性肺炎球菌感染症16例, 水痘(入院例)5例, 梅毒162例, 播種性クリプトコックス症6

例, 破傷風2例及び百日咳59例が報告された。

a) アメーバ赤痢 Amebic dysentery

報告数は5例で, 病型はいずれも腸管アメーバ症で, 宮崎市(4例), 高鍋(1例)保健所からの報告であった。性別は男性が3例, 女性が2例で, 年齢は50歳代が3例, 20歳代, 30歳代が各1例であった。主な症状として下痢, 粘血便, 腹痛, しぶり腹, 大腸粘膜異常所見等がみられた。

b) ウイルス性肝炎 Viral hepatitis

報告数は3例で, 原因病原体はB型肝炎ウイルスが1例, サイトメガロウイルスが1例, EBウイルスが1例であった。宮崎市, 日南, 高千穂(各1例)保健所からの報告で, 性別は男性が2例, 女性が1例であった。年齢は40歳代が2例, 10歳代が1例であった。主な症状として全身倦怠感, 嘔吐, 発熱, 肝機能異常, 黄疸等がみられた。

c) カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症

Carbapenem-resistant *Enterobacteriaceae* infection

報告数は4例であった。原因病原体は *Klebsiella oxytoca* が1例, 不明が3例で, 延岡(2例), 宮崎市, 都城(各1例)保健所からの報告であった。年齢は50歳代, 60歳代, 70歳代, 90歳代が各1例で, 主な症状として胆管炎, 尿路感染症, 肺炎がみられた。

d) 急性脳炎 Acute encephalitis

報告数は1例で, 原因病原体は不明であった。宮崎市保健所からの報告で, 年齢は10~14歳であった。主な症状として発熱, 頭痛, 項部硬直, 意識障害, 髄液細胞数の増加がみられた。

e) クロイツフェルト・ヤコブ病

Creutzfeldt-Jakob disease

報告数は4例で, 病型はいずれも古典型クロイツフェルト・ヤコブ病であった。宮崎市(3例), 都城(1例)保健所からの報告で, 性別は男性が1例, 女性が3例であった。年齢は70歳代が2例, 40歳代, 60歳代が各1例であった。主な症状として進行性認知症, ミオクローヌス, 錐体路症状, 小脳症状, 視覚異常, 無動性無言状態, 記憶障害, 精神・知能障害, 異常感覚, 筋強剛等がみられた。

f) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

Severe invasive streptococcal infection

報告数は 21 例で、血清群は A 群が 13 例、B 群、G 群が各 4 例、C 群が 1 例であった（※同一人から 2 種類検出が 1 例あった）。宮崎市（14 例）、都城、延岡（各 3 例）、日南（1 例）保健所からの報告であった。年齢は 80 歳代が 6 例、70 歳代が 4 例、30 歳代、60 歳代が各 3 例、90 歳代が 2 例、0～4 歳、40 歳代、50 歳代が各 1 例であった。主な症状としてショック、肝不全、腎不全、急性呼吸窮迫症候群、DIC、軟部組織炎、全身性紅斑性発疹、中枢神経症状等がみられた。

g) 後天性免疫不全症候群

Acquired immunodeficiency syndrome

報告数は 3 例であった。病型は AIDS が 2 例（指標疾患：ニューモシスティス肺炎、カンジダ症）、無症候性キャリアが 1 例であった。いずれも宮崎市保健所からの報告で、性別は男性であった。年齢は 20 歳代、30 歳代、40 歳代が各 1 例であった。感染経路は同性間性的接触 2 例、性的接触（異性間同性間不明）が 1 例であった。

h) 侵襲性インフルエンザ菌感染症

Invasive *Haemophilus influenzae* disease

報告数は 4 例で、宮崎市（3 例）、延岡（1 例）保健所からの報告であった。年齢は 80 歳代が 2 例、0～4 歳、20 歳代が各 1 例で、主な症状として発熱、意識障害、ショック、肺炎、菌血症等がみられた。ワクチン接種歴は接種有りが 1 例、不明が 3 例であった。

i) 侵襲性肺炎球菌感染症

Invasive pneumococcal disease

報告数は 16 例で、宮崎市（10 例）、延岡（5 例）、日南（1 例）保健所からの報告であった。性別は男性が 9 例、女性が 7 例で、年齢は 80 歳代が 7 例、0～4 歳、60 歳代、70 歳代が各 3 例であった。主な症状として頭痛、発熱、咳、全身倦怠感、痙攣、意識障害、項部硬直、肺炎、菌血症等がみられた。ワクチン接種歴は接種有りが 3 例、無しが 5 例、不明が 8 例であった。

j) 水痘（入院例） Chickenpox

報告数は 5 例で、病型は検査診断例が 1 例、臨床診断例が 4 例で、日南（3 例）、宮崎市（2 例）保健所からの報告であった。年齢は 0～4 歳、10

歳代、20 歳代、30 歳代、50 歳代が各 1 例であった。主な症状として発熱、発疹、膿痂疹、肺炎、免疫不全がみられ、2 例が他疾患入院中の発症であった。ワクチン接種歴は、有りが 1 例、無しが 3 例、不明が 1 例であった。

k) 梅毒 Syphilis

報告数は 162 例で、前年（166 例）とほぼ同程度であった。病型は先天梅毒が 1 例、早期顕症Ⅰ期が 72 例、早期顕症Ⅱ期が 44 例、晩期顕症が 4 例、無症状病原体保有者が 41 例であった。宮崎市（94 例）、都城（38 例）、延岡（9 例）保健所管内からの報告が多く、性別は男性が 76 例、女性が 86 例で、年齢は 20 歳代が全体の約 4 割と最も多く、次いで 30 歳代が約 2 割を占めた。感染経路は異性間性的接触が 117 例、同性間性的接触が 2 例、性的接触（異性間・同性間不明）が 19 例、不明が 23 例、母子感染が 1 例であった。主な症状として初期硬結、硬性下疳、鼠径部リンパ節腫脹、梅毒性バラ疹、丘疹性梅毒疹、扁平コンジローマ等がみられた。

1) 播種性クリプトコックス症

Disseminated cryptococcosis

報告数は 6 例で、宮崎市（3 例）、日南（2 例）、延岡（1 例）保健所からの報告であった。年齢は 80 歳代が 4 例、70 歳代が 2 例で、主な症状として発熱、意識障害、痙攣、項部硬直、呼吸器症状、胸部異常陰影、真菌血症がみられた。

m) 破傷風 Tetanus

報告数は 2 例で、宮崎市、都城保健所からの報告であった。年齢はいずれも 80 歳代であった。主な症状として筋肉のこわばり、開口障害、嚥下障害、発語障害、痙攣、呼吸困難（痙攣性）がみられた。

n) 百日咳 Pertussis

報告数は 59 例で、昨年（5 例）の 11.8 倍と増加した。宮崎市（32 例）、高鍋（14 例）、日向（6 例）、延岡、日南（各 3 例）、中央（1 例）保健所からの報告で、性別は男性が 29 例、女性が 30 例であった。年齢は 0～4 歳が 19 例、5～9 歳が 13 例、10～14 歳が 9 例、15 歳以上が 18 例で、ワクチンの接種歴は有りが 38 例、無しが 2 例、不明が 19 例であった。主な症状として持続する咳、夜

間の咳き込み、呼吸苦、スタックート、嘔吐、白血球数増多、無呼吸発作等がみられた。

2 定点把握対象疾患の発生状況

1) インフルエンザ、新型コロナウイルス感染症及び小児科対象疾患

報告総数は 54,735 人、定点当たりの報告数は 1312.4、前年の 0.9 倍、新型コロナウイルス感染症流行前の過去 5 年間（2015 年～2019 年）の平均（以下、「例年」という。）と同程度、全国の約 1.3 倍であった。（いずれも新型コロナウイルス感染症は除いた数値）

各疾患の発生状況の概要は表 3、経時的発生状況は図 2 のとおりで、その概略を次に示す。

a) インフルエンザ Influenza

2024/2025 年シーズンの報告総数は 19,741 人、定点当たりの報告数は 340.4 で、前シーズンの約半数、例年の約 0.9 倍、全国の約 1.3 倍であった。延岡（481.6）、中央（383.0）、日南（372.2）保健所からの報告が多く、年齢別では 15 歳未満が全体の約 66%を占めた。

b) 新型コロナウイルス感染症

Corona-Virus Disease-2019

報告総数は 21,851 人、定点当たりの報告数は 376.7 で、全国の約 1.2 倍であった。延岡（582.9）、高千穂（521.0）、中央（432.5）保健所からの報告が多く、年齢別では 15 歳未満が全体の 38%を占めた。

c) R S ウイルス感染症

Respiratory syncytial virus infection

報告総数は 2,449 人、定点当たりの報告数は 68.0 で、前年及び例年と同程度で、全国の約 1.7 倍であった。中央（119.0）、宮崎市（98.6）、日南（58.7）保健所からの報告が多く、年齢別では 3 歳以下が全体の 90%を占めた。

d) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

報告総数は 1,769 人、定点当たりの報告数は 49.1 で、前年の約 0.8 倍、例年の約 1.2 倍、全国の約 1.6 倍であった。中央（103.0）、宮崎市（68.0）、日南（57.7）保健所からの報告が多く、年齢別では 1 歳から 4 歳が全体の 66%を占めた。

e) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

Group A streptococcal pharyngitis

報告総数は 8,803 人、定点当たりの報告数は 244.5 で、前年の約 2.2 倍、例年の約 2.1 倍、全国の約 1.5 倍であった。日南（428.0）、宮崎市（341.9）、延岡（280.5）保健所からの報告が多く、年齢別では 4 歳から 7 歳が全体の 44%を占めた。

f) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

報告総数は 11,087 人、定点当たりの報告数は 308.0 で、前年の約 0.8 倍、例年の約 0.7 倍、全国の約 1.5 倍であった。小林（473.7）、中央（453.0）、日南（434.3）保健所からの報告が多く、年齢別では 1 歳から 2 歳が全体の 25%を占めた。

g) 水痘 Chickenpox

報告総数は 260 人、定点当たりの報告数は 7.2 で、前年の約 1.4 倍、例年の約 0.3 倍、全国の 0.8 倍であった。宮崎市（11.6）、中央（10.0）、延岡（7.8）保健所からの報告が多く、年齢別では 6 歳から 9 歳が全体の 44%を占めた。

h) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

報告総数は 7,689 人、定点当たりの報告数は 213.6 で、前年の約 2.5 倍、例年の約 1.6 倍で、全国と同程度であった。宮崎市（285.5）、延岡（273.8）、小林（222.0）保健所からの報告が多く、年齢別では 1 歳から 3 歳が全体の 64%を占めた。

i) 伝染性紅斑 Erythema infectiosum

報告総数は 239 人、定点当たりの報告数は 6.6 で、前年の約 11.4 倍、例年の約 0.3 倍、全国の約 0.7 倍であった。延岡（32.3）、宮崎市（7.5）、日南（3.3）保健所からの報告で、年齢別では 3 歳から 6 歳が全体の 56%を占めた。

j) 突発性発しん Exanthem subitum

報告総数は 744 人、定点当たりの報告数は 20.7 で、前年の約 0.8 倍、例年の約半数、全国の約 1.6 倍であった。延岡（28.3）、宮崎市（27.3）、都城（20.3）保健所からの報告が多く、年齢別では 1 歳が全体の 58%を占めた。

k) ヘルパンギーナ Herpangina

報告総数は 1,879 人、定点当たりの報告数は 52.2 で、前年の約 0.6 倍、例年と同程度、全国の約 2.2 倍であった。日南（94.0）、延岡（64.0）、中央（62.0）保健所からの報告が多く、年齢別では 1 歳から 4 歳が全体の 69%を占めた。

1) 流行性耳下腺炎 Mumps

報告総数は75人、定点当たりの報告数は2.1で、前年と同程度、例年の約0.1倍、全国と同程度であった。中央(6.0)、延岡(4.5)、宮崎市、日南、高鍋(2.0)保健所からの報告が多く、年齢別では4歳から6歳が全体の51%を占めた。

2) 眼科及び基幹定点対象疾患

眼科定点対象疾患の報告総数は242人、定点当たりの報告数は40.3で、前年の0.7倍、例年の約0.3倍、全国の約1.3倍であった。

基幹定点対象疾患の報告総数は220人、定点当たりの報告数は31.4で、前年の55倍、例年の約1.3倍、全国の約0.6倍であった。

a) 急性出血性結膜炎

Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告総数は2人、定点当たりの報告数は0.3で、前年及び例年の半数で、全国の約0.3倍であった。年齢はいずれも40歳代であった。

b) 流行性角結膜炎

Epidemic keratoconjunctivitis

報告総数は240人、定点当たりの報告数は40.0で、前年の0.7倍、例年の約0.3倍、全国の約1.4倍であった。年齢別では10歳未満が全体の25%、30歳代が全体の約26%を占めた。

c) 細菌性髄膜炎 Bacterial meningitis

報告はなかった。

d) 無菌性髄膜炎 Aseptic meningitis

報告総数は1人、定点当たりの報告数は0.1で、前年の半数で、例年及び全国の約0.1倍であった。年齢は0~4歳で、原因菌は、Enterovirusであった。

e) マイコプラズマ肺炎

Mycoplasma pneumoniae

報告総数は216人、定点当たりの報告数は30.9で、前年の216倍、例年の約2.8倍、全国の約0.7倍であった。日向(90.0)、宮崎市(50.0)、高鍋(41.0)保健所からの報告が多かった。年齢別では15歳未満が全体の約94%を占めた。

f) クラミジア肺炎 Chlamydial pneumonia

報告はなかった。

g) 感染性胃腸炎(ロタウイルスに限る)

Infectious gastroenteritis (only by Rotavirus)

報告総数は3人、定点当たりの報告数は0.4で、例年の0.04倍、全国の約0.6倍であった(前年の報告はなかった)。年齢別は0~4歳が2人、5~9歳が1人であった。

3) 月報告対象疾患

性感染症の報告総数は496人、定点当たりの報告数は38.2で、前年と同程度、例年の約1.3倍、全国の約0.7倍であった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は252人、定点当たりの報告数は36.0で、前年及び例年の約1.1倍、全国と同程度であった。

a) 性器クラミジア感染症

Genital chlamydial infection

報告総数は273人、定点当たりの報告数は21.0で、前年と同程度、例年の約1.1倍、全国の約0.7倍であった。都城(35.5)、宮崎市(24.3)、延岡(24.0)保健所からの報告が多かった。性別は男性が約4割、女性が約6割で、年齢別では20歳代が全体の63%を占めた。

b) 性器ヘルペスウイルス感染症

Genital herpes simplex virus infection

報告総数は105人、定点当たりの報告数は8.1で、前年の約1.3倍、例年の約2.0倍で、全国の約0.8倍であった。日南(57.0)、高鍋(8.0)、日向(6.0)保健所からの報告が多かった。性別は男性が約1割、女性が約9割で、年齢別では20歳代から40歳代が全体の61%を占めた。

c) 尖圭コンジローマ Condyloma acuminatum

報告総数は40人、定点当たりの報告数は3.1で、前年の約1.4倍、例年の約1.9倍、全国の約半数であった。宮崎市(8.3)、日南(3.0)、都城、高鍋(1.0)保健所からの報告であった。性別は男性が1割、女性が9割で、年齢別では20歳代が全体の73%を占めた。

d) 淋菌感染症 Gonorrhoea

報告総数は78人、定点当たりの報告数は6.0で、前年の約0.9倍、例年の約1.2倍、全国の約0.7倍であった。都城(14.0)、延岡(11.0)、宮崎市(4.5)保健所からの報告が多かった。性別は男性が約7割、女性が約3割で、年齢別では20歳代が全体

の 55%を占めた。

e) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* infection

報告総数は 245 人、定点当たりの報告数は 35.0 で、前年と同程度、例年及び全国の約 1.1 倍であった。年齢別では 70 歳以上が全体の 69%を占めた。

f) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 **Penicillin-resistant *Streptococcus pneumoniae* infection**

報告総数は 7 人、定点当たりの報告数は 1.0 で、例年の約 1.1 倍、全国の約半数であった（前年は報告なし）。年齢別では、70 歳以上が 5 人、0～4 歳、60 歳代が各 1 人ずつであった。

g) 薬剤耐性緑膿菌感染症

Multidrug-resistant *Pseudomonas aeruginosa* infection

報告はなかった。

まとめと考察

全数把握対象疾患のうち、結核は 20 歳代から 90 歳代まで幅広い年齢層で報告された。病型で比較すると、肺結核が全体の約 4 割を占め、年齢別では 60 歳以上が全体の約 7 割を占めた。また、腸管出血性大腸菌感染症は前年の約 1.7 倍と増加した。保育所での集団発生事例が 3 例報告され、年齢別では 0～4 歳が全体の約 3 割を占めた。劇症型溶血性レンサ球菌感染症は過去最多となった。梅毒は 2023 年の過去最多に次ぐ報告数となった。全国、県内共に多い状況が続いているため、今後も動向に注意する必要がある。

定点対象疾患のインフルエンザ及び小児科対象疾患の定点当たりの報告数は、前年の 0.9 倍、例年と同程度、全国の約 1.3 倍であった。インフルエンザは前年の約半数、例年の約 0.9 倍であった。また、A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前年の約

2.2 倍となり、例年の約 2.1 倍、全国の約 1.5 倍であった。

眼科定点対象疾患のうち、そのほとんどの報告数を占める流行性角結膜炎は、前年の 0.7 倍、例年の約 0.3 倍と少なかったが、全国の約 1.4 倍と多く、例年通りの傾向であった。

基幹定点対象疾患の報告数は前年の 55 倍、例年の約 1.3 倍、全国の約 0.6 倍であった。特に、マイコプラズマ肺炎が前年の 216 倍、例年の約 2.8 倍、全国の約 0.7 倍で、流行の年となった。

月報告対象疾患の性感染症の報告数は前年と同程度、例年の約 1.3 倍、全国の約 0.7 倍であった。性器ヘルペスウイルス感染症は 20 歳代から 40 歳代に多く、それ以外の疾患は 20 歳代に多く認められた。また、薬剤耐性菌感染症は前年及び例年の約 1.1 倍、全国と同程度であった。

本調査結果から、疾患によって流行発生時期や地域差、年齢差等があることが分かった。今後も引き続き、感染症情報の収集と解析を的確・迅速に行い、感染症の発生動向に細心の注意を払うとともに、幅広い世代に適切な情報の提供と感染予防の啓発を行っていく必要があると考えられる。県内だけではなく、全国や世界の感染症流行状況にも意識する必要がある。公衆衛生対策を立案や起動出来るように関係機関と日々連携し今後も事業に励んでいきたい。

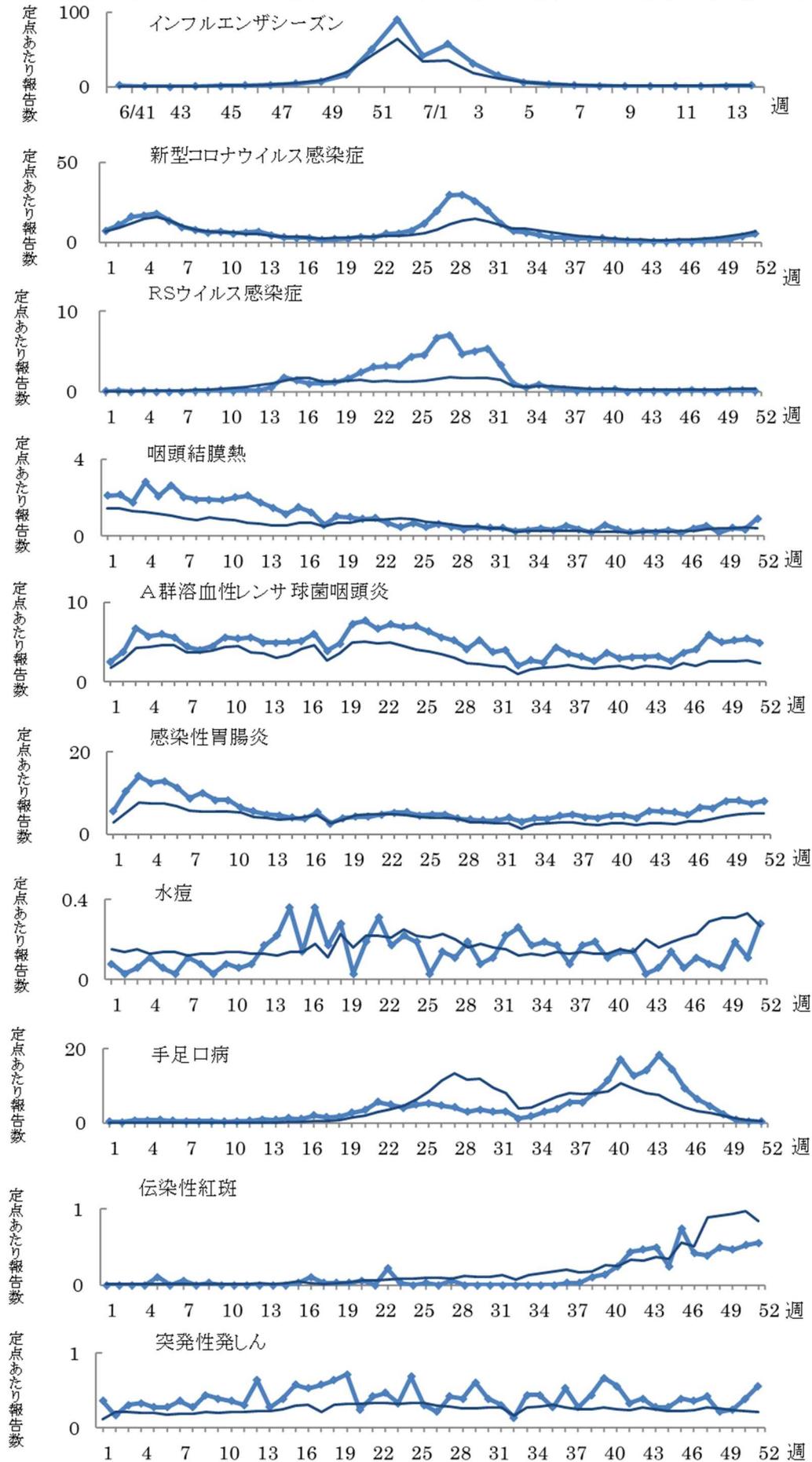
備考)

感染症発生動向調査事業は、患者情報と病原体情報から構成されており、当研究所の微生物部では病原体情報を得ている。

文献

- 1) 厚生労働省保健医療局長通知:感染症の予防及び感染症患者に対する医療に関する法律の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施について、平成 11 年 3 月 19 日健医発第 458 号。

図2 定点把握対象疾患（週報告対象）の定点あたり報告数の週推移（経時発生状況）



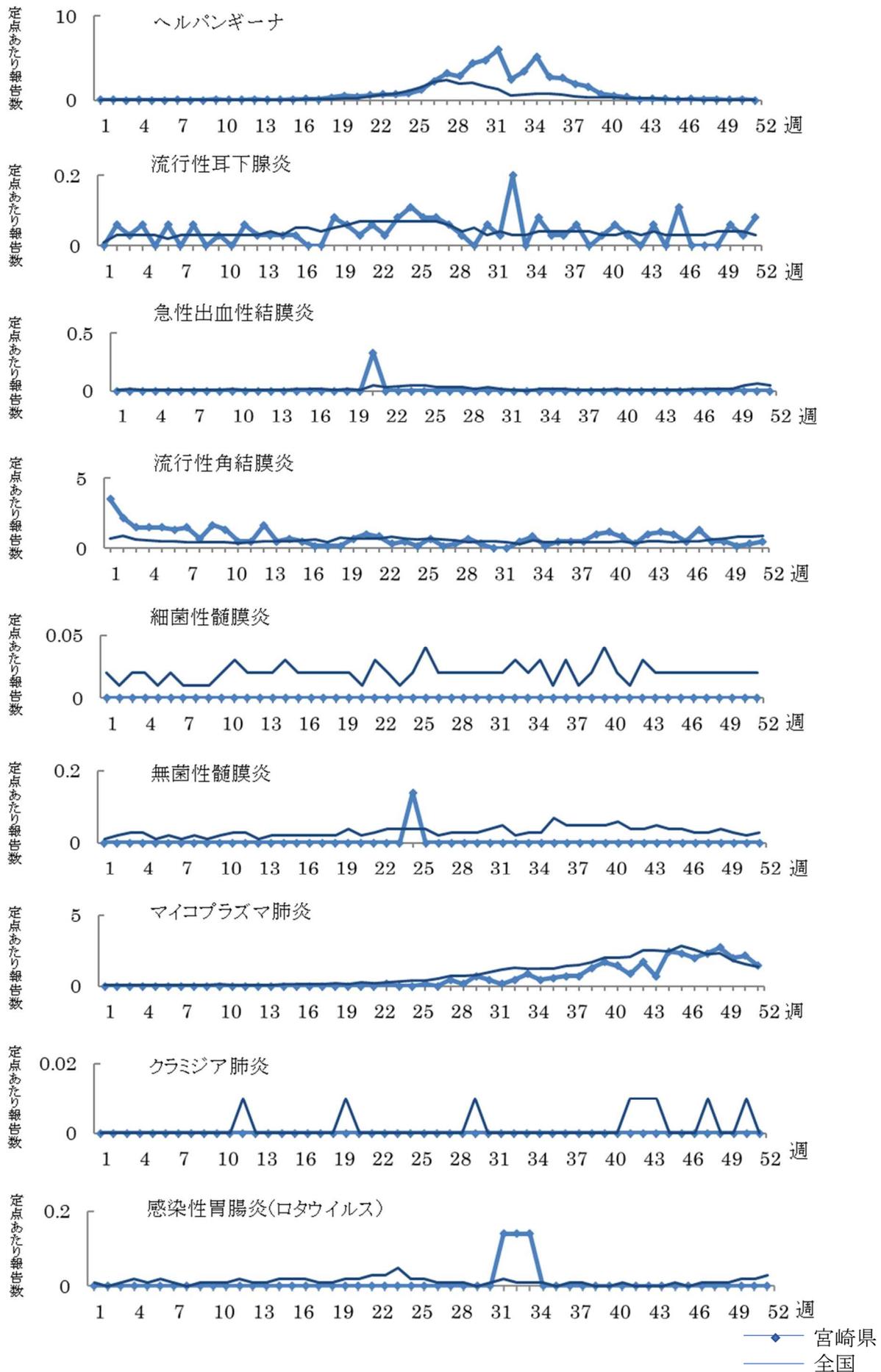


表3 定点把握対象疾患の発生状況の概要（宮崎県，2024年）

疾患名	報告総数	定点あたり 報告数	年齢群別報告数の割合		昨年比 (県内2023年) (%)	2015～2019年 平均との比 (%)	全国比 (2024年) (%)
			好発年齢群	報告総数に 占める割合 (%)			
インフルエンザ	19,741	340.4	15歳未満	66	54	93	125
新型コロナウイルス感染症	21,851	376.7	15歳未満	38	—	—	117
RSウイルス感染症	2,449	68.0	3歳以下	90	97	97	173
咽頭結膜熱	1,769	49.1	1歳～4歳	66	84	119	155
A群溶血性 レンサ球菌咽頭炎	8,803	244.5	4歳～7歳	44	218	211	154
感染性胃腸炎	11,087	308.0	1歳～2歳	25	82	65	147
水痘	260	7.2	6歳～9歳	44	144	28	80
手足口病	7,689	213.6	1歳～3歳	64	254	162	101
伝染性紅斑	239	6.6	3歳～6歳	56	1138	29	65
突発性発しん	744	20.7	1歳	58	84	47	157
ヘルパンギーナ	1,879	52.2	1歳～4歳	69	55	101	219
流行性耳下腺炎	75	2.1	4歳～6歳	51	97	5	102
急性出血性結膜炎	2	0.3	40歳代	100	50	50	32
流行性角結膜炎	240	40.0	10歳未満 30歳代	25 26	70	29	137
細菌性髄膜炎	0	0.0	—	—	0	0	0
無菌性髄膜炎	1	0.1	0歳～4歳	100	50	11	9
マイコプラズマ肺炎	216	30.9	15歳未満	94	21600	277	66
クラミジア肺炎	0	0.0	—	—	0	0	0
感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)	3	0.4	10歳未満	100	—	4	61
性器クラミジア感染症	273	21.0	20歳代	63	97	109	69
性器 ヘルペスウイルス感染症	105	8.1	20歳代～40歳代	61	127	203	79
尖圭コンジローマ	40	3.1	20歳代	73	143	185	47
淋菌感染症	78	6.0	20歳代	55	92	119	67
メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌感染症	245	35.0	70歳以上	69	104	114	107
ペニシリン耐性 肺炎球菌感染症	7	1.0	70歳以上	71	—	109	52
薬剤耐性緑膿菌感染症	0	0.0	—	—	0	0	0